

2021. 10. 10. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書1章1～8節
『あなたは誰なのか』

新約聖書とは一言で言い表せば、それはまさしく「多様性」なのです。

多様性と言えば何やら難しそうに聞こえますが、簡単に言えば一つの問いに一つの答えではなく、たくさんの答えが備えられているということなのです。そして、その新約聖書を読むということはイエスの思想と初期キリスト者たちがそれぞれの場において福音を証した、まさにその発言を「聴く」という行為に他なりません。

新約聖書とはイエスの死後20年程経った紀元50年頃に「パウロ書簡」が書き始められました。それから2世紀半ばのおよそ100年位の間に福音書を始め、現在のわたしたちが持っている聖書が大体出揃ってきたのです。その執筆や編集に関わった人々が、当時の社会や思想の荒波に揉まれながら彼らの立場や考えの枠の中で理解することが出来た限りにおいての「福音」なのです。つまり、いろいろな問題と向き合いながらその時々々の状況に「ふさわしく」福音を再解釈していった歴史が新約聖書なのです。ですから、新約聖書とは決して古来から不動の「決まり文句」の集大成などではないのです。

さて、マルコによる福音書は60年代半ばに最初の福音書として成立しました。なぜ、こんなに遅かったのでしょうか。その間、教会では何が読み上げられていたのでしょうか。

実はその間、初代教会では「イエスの文言集」のようなものが語り継がれておりました。イエスを語ること、イエスについて語ること、そしてそれを聴くことは初代教会の人々の心を常に新しく動かし、彼らの間にイエスが現存しているかのような働きをしていま

した。従って、伝承がそうした生きた力を持っている限り、人々はイエスを文書にして固定しようとはしませんでした。しかし、70年前後のユダヤ戦争の頃から迫害が厳しくなり、初代教会はユダヤ人ではなく異邦人に伝道の対象を切り替えたのです。ここで福音書という文書化の必要性が生まれました。

60年代まではそれぞれ固有のイエス像(キリスト論)が跋扈していましたが、それらを資料として福音書を組み立てる時、それを単純に述べるのではなく、マルコは批判的に構成しました。例えば、最初に奇跡物語を多く取り入れてイエスの奇跡行為に肯定的関心を持たせつつ、奇跡と教えを同等に扱ったり、イエスによる罪の赦しの宣言を挿入したりして、奇跡物語が持っていた「超人的イエス」理解を抑制します。しかも、後半は十字架に死ぬ「受難者イエス」を強調します。このようにマルコはマタイが後に描いたようなイエス伝ではなく、イエスの生涯をそれ自体が「福音」として理解し、更にイエス自身を福音と同一視し、人々の中に生きたイエスを描いたのです。

その記念すべきマルコの第1章には「神の子イエス・キリストの福音の初め」という宣言と、それに続く洗礼者ヨハネのことが物語られます。

それは「イエス(福音)とは誰(何)なのか」という問いであり、同時に「悔い改めを伴う一回限りの洗礼(バプテスマ)という手続きが罪の赦し(救い)をもたらす」という答えなのです。

この問いと答えを伴いつつ初代教会の人々は生きたイエス(福音)と共に未知の世界へと漕ぎ出して行ったのです。それは固定化した福音理解ではなく、生きているイエスであるが故にこそ、柔軟にしたたかに変化する多様性の中に歩みを進めて行ったのです。